アトピー性皮膚炎と真菌について

池澤善郎 1)2)3)、小林照子 1)3)、蒲原　毅 3)
1)国際医療福祉大学 熱海病院 皮膚科、2) 横浜市立大学大学院 医学研究科 環境免疫病態皮膚科学、3)横浜市立大学附属市民総合医療センター皮膚科

アトピー性皮膚炎(AD)は、皮膚バリア機能障害を生じ易く IgE 抗体産生の高応答性という所謂アトピー素因・体質のもとで湿疹病変が軽快と再発を繰り返すことで慢性に経過する特徴的な瘙痒性皮膚疾患としてよく知られ、その発症悪化要因としてアレルギー反応や刺激反応を誘発する外的な各種アレルゲンや刺激物質そして内的な発汗や精神的ストレスなどが注目されている。その中で、私達は、最近、皮表の黄色ブドウ球菌叢が獲得免疫のみならず自然免疫の関与する過敏症の発症に重要な役割を果たしていることを報告したが、以前から AD が悪化して難治化する要因のひとつとしてカンジダやマラセチアなどの腸管や皮膚に常在する真菌叢が果たす役割にも注目し検討してきた。とくに、マラセチアは、好脂性の真菌としてヒトの顔面、上胸背部など脂漏部位を好んで増殖することから、成人の AD 患者のうち頭頚部に難治性の皮疹がみられる場合の悪化因子として注目されており、事実、難治性の AD に対して抗真菌療法が明らか改善効果を示し、その効果とこれら真菌抗原に対する即時型反応や遅延型反応との関係についても興味ある知見を得ている。そこで、本シンポジウムでは、アトピー性皮膚炎と真菌の関わりについて、これまでの経緯と最近の知見を交えて概説する。